

ドリームウォーカー

～ 楽しい夢見術 ～



作・anurito

絵・**ゴメPo!**

清水 (きよみず)

ふふふ。
夢の中なら、
ボクでも
主役！

本作品の語り手の男性だが、主人公とは呼び難い。リアルでは、大卒の就職浪人で、やる気のないニート。

影子 (えいこ)

願いかなえし
水晶の玉よ。
わが願い、
かなえたまえ。

清水のガールフレンド。リアルでは、女子高生。善良だが、どこかズレて、学校では、いじめられっ子らしい。

球異 (きゅうい)

そんな事件、
名探偵の
おいらが
即解決さ！

自称・名探偵の青年。陽気な女っただし
で、トボケた事ばかりしている。シルク
ハットがトレードマーク。

令子 (れいこ)

球異のヤツ、
また嘘ついたな！
これで
ぶん殴ってやる！

球異のガールフレンド。しっかりした性
格のお姉さんで、仲間を引っ張ってくれ
るが、若干きついところもある。

所田 (ところだ)

君たち！
天才の私に
不可能は
ないのだよ！

発明家の青年科学者。ご都合主義の発明品を連発して、皆に貢献するが、いつも遅れて現われるのが玉にきず。

ラリー

私の事をおばさん
呼ばわりするヤツ、
みんな
殺す！

皆とは知り合いだが、行動はともにしない、謎の女性。ワガママでやりたい放題の、最強のトラブルメーカー。





夢をより楽しむ為には、
二つの要素が不可欠です。
一つは「これは夢だ」と
自覚できるようにする事。
もう一つは、
見たい内容の夢を
意図的に見れるよう
になると言う事です。



すくじまの
球異が、
こんな気の利いた事
するはずがない。
さては、これ、明晰夢？

「今、自分は夢を見てるんだ」
と自覚できる夢の事を
専門用語では「明晰夢」と呼びます。
一部の人のみの特殊現象ではなく、
コツさえ掴めれば、
誰でも見る事は可能です。
おかしな状況に出くわした時、
ふと「これは夢？」と
察知できればいいのです。

球異

令子

疲れていない、
浅い夢の状態の方が
明晰夢には
なりやすいです。

見たい夢を自由に見る方法も
決して難しくはありません。
眠る直前に、見たい夢の情報を
たっぷり頭に叩き込めばいいのです。
寝る前に、怖いテレビ映画を見ると、
そのまま怖い夢を見ちゃうのと、
原理は同じですね。

いえっ！

所田

いやん！

影子ちゃん、
寝る前に、
何見たの？

これらの
夢見術が
駆使できれば、
悪夢にも
対抗可能に
なります。

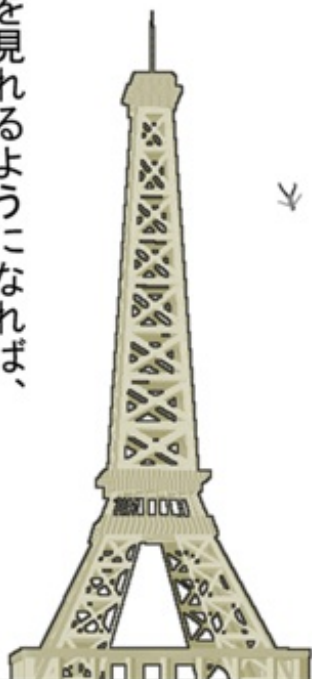
悪夢を見たくなければ、
思いつめるほどの不安やストレスを
覚醒時に溜め込まない事です。
せめて、眠る直前ぐらいは、
楽しい音楽や物語などに浸って、
気持ちをリラックスさせたいものです。



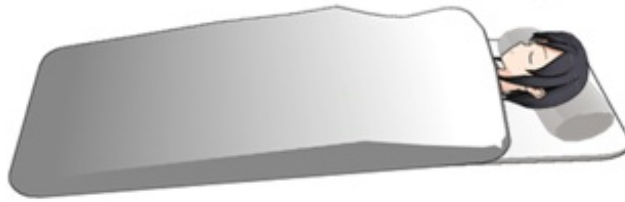
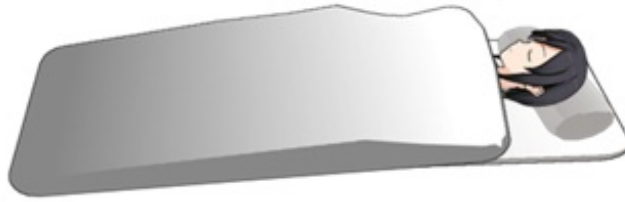
悪夢よ、
さめよ！



明晰夢を見れるようになれば、
万が一、悪夢を見てしまっても、
自分の意思で夢の中断が可能です。
夢の中でも、仕事や受験勉強をしていたら、
これは夢だと分かった時点で、
堂々と止めてしまえるのです。



おかしい夢



ギャグのような実話ですが、「明日の朝は絶対に遅刻できない、寝坊できない」と気張って寝ると、寝ている夢や、起床する夢を繰り返し見てしまいます。

布団から出ずに、そのまま二度寝する場合、今見たばかりの夢の内容を強く思いふけていたりすると、本当に、その夢の続きを見ちゃう事もあります。

では、夢の中では、具体的にはどんな事ができるかと言いますと、





★本当に人殺しやエッチができるかは、ご自分の夢でお確かめください。



もし、皆さんも、
ドリームウォーカーでしたら、
今度は
夢の中でお会いしましょう！

今回の作品では、標準装備以外の3Dモデル素材を大量使用させていただきました。素材提供してくださった以下のサイトと3Dモデル職人の皆様に深くお礼申し上げます。

- ILMA コミPo! データWiki
- ぷにぷにダンス コミPo! 部屋
- もえコミPo!
- e3paper

オープニング

夢、夢、夢、全ては幻の世界。

オレたちはドリームウォーカー。

オレたちは、一つの夢を複数の人間で共有できるようになった幸運な人種なのだ。

今夜も、オレ清水と仲間たちは、夢の中で集まって、何でもアリの大冒険を楽しむのである。

さあ、今日はどんな夢を見るのだろう。

夢の中で、気が付くと、オレは荒野のど真ん中に立っていた。一面荒れ地の、まさに未開拓の大地である。

「清水さん、こんばんわ。今日の夢はファンタジーみたいね。魔法と剣が支配する不思議な世界よ」

オレの隣から、女の子の可愛い声が聞こえてきた。目を向けると、そこに立っていたのは、ケータイ小説家仲間の影子だった。彼女も、オレと同じ、ドリームウォーカーなのだ。

「見て、見て。この衣装！今宵はエコもキュートな魔法少女よ」

影子は、コスプレにしか見えない奇妙な服を着てて、嬉しそうに、はしゃいでいた。彼女は、オレにとっては、ネット上では恋人のような存在だ。リアルでは会った事はないのだが、夢の中では、ものすごい美少女で、どんなヘンな服でも似合っちゃうのである。

「清水さんの役柄は勇者かもね。ほら、剣を持ってるわ」

「ボクが勇者〜？」

オレは顔をしかめた。自分じゃ気が付かなかったが、影子に言われた通り、確かにオレの手には剣が握りしめられていた。しかし、リアルのオレは、あらゆるスポーツと無縁の人生を送ってきた、今はケータイ小説を書く事だけが楽しみのニートなのだ。

「いいなあ。今夜の主演は清水かよ〜」

そんな陽気な男性の声が聞こえてきた。

声の方に目を向けると、そこにはペアの男女が現われた。

彼らもドリームウォーカーで、同じくケータイ小説家仲間の球異と令子である。この二人も、夢の中ではバツグンの美男美女だ。言っておくが、夢のイメージには、現実がそのまま反映されないで、皆、テキトーにかっこよくデフォルメされているのである。

「こんばんわ。清水くん、影子ちゃん」

令子が落ち着いた声で言った。年少の影子と違い、令子は大人の魅力に溢れた女性である。彼女も魔法使い役みたいだが、アダルトにボンテージの衣装で決めていた。

「令子さん、すてき！エコも、そんな衣装が似合う女性になりたかったな」

「影子ちゃんだって、そのヘンな服、とっても可愛いわよ」

女性陣二人は、お互いに褒め合っていた。

そして、あの陽気な声の主・球異の方は、なぜか、この舞台にまるで場違いな紺のスーツ姿で、シルクハットをかぶっていたのだった。こいつは、どの夢に出てくる時も、この恰好なのだ。

「清水が主演なら、おいらは、清水を助ける名探偵役だぞ」

球異が張り切って言った。

「ファンタジーの世界に私立探偵なんか出てくるかよ」

オレは小声でやじった。

球異は、いつも、こんな調子なのだ。リアルでも、推理もののベタなケータイ小説ばかり書い

ていて、どんな夢の世界であろうと、探偵役をやりたがって、この姿で参加してしまうのである。こんなとぼけた球異ではあるが、令子とはラブラブな関係だったりするのだ。

「あとは、所田くんが来たら、いつものメンバーは全員集合ね。また遅刻してくるつもりなのかしら」

令子が周囲を見回した。

「あんなヤツ、ほっといて、早く物語を始めようよ。ほら、あそこに知らない人がいるよ」

球異が指差した方角には、確かに、所田とは明らかに別人の何者かが佇んでいた。

オレたちは、その人物のもとへ向かってみる事にした。

よく見ると、まだ幼そうな女の子である。不安そうな表情をしていて、両手で小さな猫を抱えていた。

「キミ、なんて名前？」

令子が代表して、その子に尋ねた。なにせ、他のメンバーが、ニートのオレに、とぼけた球異、子どもの影子だから、ほっといても、一番しっかりした令子がリーダーっぽくなってしまおうのである。

「ヒカル。ヒカルと言うの」

その子が、たどたどしく答えた。彼女が抱いていた猫もミャーと鳴いた。

「ヒカルくん。ここがどこだか分かるかな？お姉さんたちに教えてくれないかしら」

令子が、さらにヒカルへと質問した。ドリームウォーカーの夢の中での冒険は、こうやって、出会った登場人物たちから情報を引き出して、その夢の内容を固めてゆき、物語を進めていくのである。

「分からない。ここはどこなの？」

と、ヒカルの口から飛び出したのは、予想外のセリフだった。

「分からないって？もしかして、ヒカルくんもドリームウォーカー？」

ドリームウォーカーは、オレたちだけじゃない。夢の中を冒険中、初対面のドリームウォーカーと出会ってしまうような事も決して少なくはないのだ。しかし、このヒカルと言う子は、ただのドリームウォーカーでもないようだった。

「ヒカル、地球に帰りたい。突然、この奇妙な世界に迷い込んでしまったんだ」

ヒカルがそう言ったので、すぐオレたちはピンときたのだった。

「なるほど。ここは、そういう世界観なのね。異世界に迷い込んでしまった地球の普通の人間。ケータイ小説のファンタジーものでは、よく見かけるパターンよ。と言う訳で、今夜の夢の主演は、ヒカルくんにはほぼ決定！」

令子が言った。

「おお、清水、残念だったなあ」

球異が嬉しそうにオレの肩をたたいた。

「別にいいよ。どうせ、勇者なんて、やりたくなかったし」

オレは投げやりに答えた。

「そんな、あきらめちゃダメよ。まだまだ主演の可能性はあるわ。希望を捨てないで」

勘違いしているのか、影子が真剣にオレの事を励ましてくれた。

ちなみに、オレたちが見る夢と言うのは、なぜか、ファンタジーだとか学園ドラマだとかホラ一風だとか、物語性の強いケースが多い。これは、どうも、普段からケータイ小説ばかり書いたり、読んだりしているから、頭がネタでいっぱいになっていて、その影響みたいなのだ。おかげで、オレたちドリームウォーカーは、夢の中でもろケータイ小説みたいな世界観を楽しめちゃうのである。オレたちにとっては、夢の空間は、通信ゲームなんかよりもはるかに楽しいバーチャルゲームの世界なのだ。関連性があるのかどうかは知らないが、ドリームウォーカーになれる人間はケータイ小説家が多いとも言われている。

さて、世界観が分かってくると、夢の中の物語も急速に動き出した。夢の世界は不安定で整合性はないが、一つの事実さえ確定すると、けっこう、それ中心に内容がまとまりだすものなのだ。

今回の夢のキーワードは、ヒカルの存在らしかった。

突然、空から激しい轟音が聞こえてきた。まぶしかった空も部分的に暗くなってしまった。

見上げると、何やら、オレたちの頭上には、巨大な宇宙船らしきものが空中停止していた。魔法の世界に宇宙船というのもミスマッチな気もするが、このへんの脈絡のなさが、まさに夢の世界の特徴でもあるのだ。

その宇宙船の方から声が聞こえてきた。

「我々はガバナス星帝国軍だ。そこにいる子どもを我々に渡しなさい。我々の方では、すでに、その子の母親を捕えて、監禁している。この連中が異世界から来た生物である事は知っているぞ。我々は、こいつらが、どうやって、こちらの世界にやって来たかの秘密を解いて、異世界へも侵略の手を伸ばすのだ」

思いっきりベタなSFファンタジーの設定である。

しかし、いちいち、白けているヒマはなかった。間もなく、宇宙船はオレたちに実力行使を仕掛けてくるだろう。そこで、当然、オレたちは、物語らしく、かっこよく撃退しなくちゃいけないのだ。

「さあ、話が始まったわ。絶対、ヒカルくんは渡しちゃダメよ！」

令子が叫んだ。

「ヒカルさんは、エコが必ず守る！」

と、影子も目を輝かせて、宣言した。

女性陣は、本当に順応が早い。ストーリーの強引さとか不自然さとか、全然、気にならないのだろうか。いや、どうせ、ケータイ小説もどきの夢なんだから、いちいち考え込んだりする方が愚かなのかもしれない。

「皆さん、ごめんなさい。ヒカルのせいで迷惑をかけちゃって」

ヒカルが申し訳なさそうに頭を下げた。抱いている猫もニャーと鳴いた。

「ヒカルさんは気にしなくていいのよ。エコたちは、会った時から、もう友達同士よ。友達は皆で助け合わなくちゃ」

影子が力強く言った。すっかり物語に入り込んでしまっているらしく、こんなクサイセリフも平

気で口になっている。とても、リアルでは恥ずかしくて言えないセリフだ。それだから、よけい、こんな夢の中では使いたくなっちゃうのだろうか。

「ほら、男性陣、出遅れてるわよ！早く、物語に参加して！」

令子に、いきなり、怒鳴られてしまった。

「じゃあ、探偵の出番だ。おいらが、このピンチを見事に回避してやる」

球異がポンと自分の胸を叩いた。

だから、この状況で、探偵キャラに何ができると言うのだ。

「再度、警告する。命令に従わないようなら、他の人間は皆殺しにして、ヒカルだけをガバナスの母星に連れてゆくぞ」

宇宙船から、新たな声が聞こえてきた。

「ほら、勇者の活躍シーンよ。ここはまず、傭兵役の清水くんが腕前を披露して、敵のザコを追っ払うと言うのが、もっともステレオタイプな展開でしょう」

令子に言われて、オレは慌てた。

「戦えて言われても、ボクは剣しか持ってないんだよ。あんな空に浮かんでるヤツと、どうやって戦えばいいんだよ」

「あきらめないで。たとえ無理そうでも、まずは試してみようよ」

またしても、影子から、状況がよく分かってないような励ましを受けてしまった。

「ここは、勇者の出る幕じゃないよ。魔法で何とかするべきだ。ほら、令子さんと影子ちゃんでも何とかしてよ」

オレは、二人に活躍を押しつけようとした。

「全くもう、うちの男性陣は役に立たないんだから」

令子がヒステリックにわめいた。

チラッと球異の方を見つめると、探偵道具の一つである虫眼鏡と鏡を取り出して、一生懸命、宇宙船の方に太陽光線を当てようとしていた。本気で、そんなんで、巨大な宇宙船を撃ち落とせると思っているのだろうか。

その時、ヒカルが叫んだ。

「ヒカルのせいで、これ以上、皆に迷惑はかけられない。ここは、ヒカルが何とかやってみる」

キッとヒカルが宇宙船の方を睨みつけると、抱いている子猫がニャーと力強く鳴いた。一瞬、一人と一匹がオーラに包まれたように見えた。

次の瞬間、空中に静止していた敵の宇宙船はボカンと大爆発したのだった。

オレたちは、おーっと歓声をあげてしまった。

「さすが、主人公！地球人のはずなのに、こんなに凄い超能力を使えるとは。こうして、異世界の魔法使いたちに認められた主人公は、仲間になって、じょじょに頭角を現わしてゆくと言う展開になるのね」

令子が言った。きっと、その通りなのであろう。こうやって、先の展開を予測しながら、話を進めてゆくというのも、おかしいものである。

「ありがとう。まだまだ、未熟者ですが、皆さん、よろしく」

ヒカルがペコリと頭を下げた。あんなパワフルな力を見せつけておきながら、調子に乗ったりもせず、こうして謙虚な態度をとれるとは、このヒカルと言うヤツも、皆から好かれるタイプの主人公の定型パターンをよく分かっているようである。

ここで、よくある話の流れとしては、魔法使い仲間のうちの一人が、内心、ヒカルの事が気に入らないと感じて、イジワルしたり、嫌がらせしたりすると言うものだが、その憎まれ役って、やっぱり戦闘系キャラのオレが担当しなくちゃいけないのかなあ、とかオレが勝手に考えふけている最中、ヒカルにさっさと先のセリフを言われてしまったのだった。

「ヒカルのママが、あの宇宙の征服者たちに捕まってるって。いっしょに、この異世界に飛ばされてたんだ。ママに会わなくちゃ。ママと一緒になれたら、何となく地球に戻れそうな気がする」

ヒカルに抱かれている猫がニャーと鳴いた。

「そうよ、それだわ！これが、今回の夢の筋書きなんだわ。この夢では、私たちは、サブキャラとして、ヒカルくんをママの元まで連れて行ってあげたらいいのよ」

令子が、声を弾まして、ポンと手を叩いた。

「いや、ダメだ」

と、オレはいきなり反対したのだった。

「え、なんで？あ、さては、清水くんったら、さっそく、仲間内にたいてい一人はいる嫌われキャラを自主的に演じてくれているのね」

オレの反応を見て、嬉しそうに令子が言った。

「違う、そんなんじゃない！皆、よく考えてみなよ。ヒカルちゃんのママを捕まえている悪党というのは宇宙人だよ。きっと、ずっと遠い宇宙の星に住んでいるんだ。そんなところへ、今のボクたちのキャラ設定では連れていけそうにないし、仮に連れていけたとしても、大長編ストーリーになるのは間違いない。だとすれば、結末を見る前に、きっと夢から覚めちゃうよ。そんな終わりまで楽しめないストーリーだったら、最初っから参加しない方がいい」

オレは実に論理的に説明してみせたのだが、皆はポカンとしていたのだった。

「あのう。そんな理由で反対したの？」

令子が言った。

「ダメよ。そんなに簡単にあきらめたら。出来るところまででも頑張ろうよ」

影子からも言われてしまった。

「だけど、最後まで読み切れない小説って、後味悪いし。ほら、ケータイ小説でも、よくあるじゃない。作者が途中で書くのを放棄して、完結しないで、ほったらかしにされてるヤツ。ああいうのを間違っって読んじゃうと、ボクはずっと続きが気になって、自分の執筆もはかどらなくなっちゃうんだ」

オレは懸命に力説してみたのだが、女性陣は呆れた顔のままなのだった。

その最中に、球異のヤツが抜け駆けして、ヒカルのそばに寄り添っていた。

「よーし。人探しはまさに探偵物語の典型ストーリー。ここは、名探偵のおいらが、ヒカルちゃんのママを見事に連れてきてあげよう。まずは、連絡先として、ヒカルちゃんのリアルでのケー

タイの電話番号を教えてくれないかな」

もちろん、ヒカルからまんまと電話暗号を聞き出す前に、球異は令子にぶん殴られて、地面にねじ伏せられてしまった。

球異と令子の関係は決して冷えかけてる訳でもないようなのだが、球異のヤツはなかなかの女つたらしで、令子と言う恋人がいながらも、すぐ他の女性に目移りしてしまう悪いクセがあるのだ。特に、夢の世界では、誰もが美人、美少女で登場する為、令子がそばにいても、無意識に球異がナンパに走ってしまう事もしばしばで、そのたびに球異は令子にぶん殴られているのである。夢の中の暴力だと分かっているので、令子の方もよけい情け容赦がないのだ。

「あと、男性陣に言っとくけどさ」

と、令子が、オレと球異と影子だけを集めて、こそっと喋った。

「ヒカルくんの事をちゃん付けで呼ぶのは失礼よ。あの子さ、きっと男の子よ」

言われて、オレも、恐らく球異もびっくりしたのだった。

可愛い顔つきだったので、女の子だとばかり思っていたのだが、確かに、ヒカルはスカートをはいていた訳でもないし、髪が長かった訳でもないのだ。声の高さも、声変わり前の男の子と思える範囲だったし、猫好きだから女性だとも言えまい。オレたちがヒカルを女性と判断していた一方で、令子や影子はヒカルを男の子だと見なしていたようなのである。そう言えば、喋り言葉も、男っぽいし、あるいは、ボーイッシュな女の子のようにも見えなくはない。

もう一度、遠目にヒカルの姿を観察しながら、オレたちは、本当にヒカルの性別がどっちなのか分からなくなってきた。

ネット上でも、そういう性別不明なヤツは、よくいるものだ。男のくせにアバターに女の子のイラストを使ったり、いわゆるネカマと呼ばれる連中である。夢の中でも、実体がいくらでもデフォルメされてしまう為、性別が分からなくなってるヤツは多いのだ。夢の世界での他人との交際も、けっこう難しいのである。

「そんな訳で、本当は男の子かもしれないんだから、ヒカルくんを女の子扱いするのは、いっさい止めるようにね」

令子は、はっきりと釘を刺したのだった。

そんなに分からないのであれば、いっそ、本人に聞いてみたらどうかと言う人もいるかもしれない。しかし、ネットであっても、相手に性別や年齢などを尋ねたりするのは、かなり失礼な行為ではないか。夢の中でも同じであり、いくら何でもアリの夢の世界でも、最低限のマナーは存在するのである。それがドチケツって奴だ。

何だか話がそれたまま、なかなか先に進まないようだが、そんな時、男の高笑いが聞こえてきた。

「わっはっは。やあ、諸君、待たせたな」

この登場の仕方は、オレたちの常連仲間の一人、所田に間違いない。案の定、笑い声の方に目を向けると、そこには白衣を着た年長の男性が立っていた。こいつが所田である。夢の中の所田は、他の連中のようにハンサムと言う訳でもないのだが、代わりに、眼鏡をかけて、知的な顔つきをしていた。それもそのはず、所田はケータイ小説サイトではもっぱらSF小説ばかり書いて

いて、自称・天才発明家きどりなのだ。夢の世界でも、そのテのキャラばかり、やりたがっていた。

「待たせたんじゃないわよ。また遅れてきて。最初の見せ場は、もう終わっちゃったわよ」

令子が所田に文句を言った。

「それだけじゃないぞ。なんで、また今日も白衣を来てるんだよ。ここはファンタジー世界だから、科学者はお呼びじゃないぞ」

球異も所田にケチをつけた。とても、ケチをつけれるような立場ではないような気もするのだが。

「まあまあ、諸君。もっと自由な発想を持とうではないか。私は、ただの科学者じゃない。魔法博士だ。科学と魔法をミックスした発明品を、この物語に提供してあげよう」

いつも遅刻して現われるくせに、参加後の所田は平気で自分のペースで夢の物語を進めようとする。今回もそうだ。

「さて、話は途中から聞いたよ。ヒカルくんを宇宙の果てにまで連れてってあげればいいのだね。それなら、まさに私の出番だ。最高の魔法発明を使う時が来たようだね」

所田がパチンと指を弾いた。すると、所田のすぐそばの宙に突然、一軒家ぐらいの大きさのカゴチャの出来損ないのような物体が出没したのだった。

「なんだ、それ？」

と、思わずオレもつぶやいてしまった。

「これぞ、魔法発明の最高傑作、魔法船だ。これに乗って、皆で宇宙の果てまで旅する事にしよう」

所田が胸を張って、説明した。

「要するに、ただの宇宙船じゃないか。何でも＜魔法＞とさえ付ければ、ファンタジー世界の小道具になるって訳でもないぞ」

オレはやじった。

「細かい事は気にするなって。今回の物語は、飛び入り参加のヒカルくんのおかげで、ペア三組で楽しめる事になった。私も、今回ばかりは、ガールフレンド付きの冒険を出来る訳だ。いやあ、ヒカルくんさままだよ。素敵な宇宙旅行になりそうだな」

くん付けで呼んでたわりには、所田のヤツもヒカルの事を女の子と確信していたらしい。ヒカルの肩に図々しく腕を回そうとした所田が、令子のエルボーをくらって、地面にはいつくばったのは、それから数秒後の事だった。

はっきり言って、このような展開は、オレとしては反対なのだ。目的地を定めて旅をするなんて、冒険ものとしては王道のストーリーではないか。旅の途中では、さまざまな事件やトラブルが起きるに違いない。敵の刺客とかも現われるだろう。一つの宿泊先で、必ず一つはドラマが発生すると考えてもいい。まさに大長編連続活劇である。

これでは、とても一つの夢の中で決着がつくとは思えない。これまでの夢見の経験からして、恐らくは、一番盛り上がったところで目が覚めてしまうのだ。そんなんじゃ、不完全燃焼で、欲求不満になってしまうではないか。オレは、そんな事になるのは絶対にいやである。この物語を続けるのは、どうしても気が向かないのだ。

オレがそうやってブツブツ考えている間も、一同はいつの間にか、あの所田の魔法船とやりに乗り込んでいて、ハッとした時には、所田がこう叫んだのであった。

「よし、ガバナス軍団の本拠地に到着したぞ」

それを聞いて、オレは思わずきょとんとした。

「え、え？もう、ついたって？宇宙の長旅はどこに？」

「誰が宇宙を旅すると言った？この魔法船は魔法ワープする為の装置なのだ」

得意げに所田が言った。

「だから、要するに、ただのテレポート装置だったんだろ。いちいち＜魔法＞とか付けて、ムリに世界観を合わせようとするなよ。そもそも、瞬間移動でこんなに簡単に敵の本拠地に乗り込めるんだったら、宇宙に旅立つとか、悪者が宇宙の征服者だとかの設定はどうなっちゃうんだよ。全然、意味ないじゃないか。近所の盗賊が敵キャラだったとしても、まるで問題なかった事になる」

「清水くんったら、落ち着きなさいよ。何やら、モノログでごちゃごちゃグチってたようだけど、このご都合主義の展開のおかげで、どうにか、今の夢だけで、この物語もエピローグまで体験できそうになったじゃない。その事を素直に喜びなさいよ」

令子がオレをたしなめた。

「そうよ。やっぱり、信じる事は大切なんだわ。だから、ムリかと思われた清水さんの希望もかないそうになったのよ」

影子が、またまたピント外れに感激してみせた。可愛い子だから許すが、ほんと、この子はどこかずれている。リアルでは、学校でいじめられてるとか言っていたが、このへんの勘違いのひどさが原因なのだろうか。

「ありがとう、皆、ほんとにありがとう。これでヒカルもママに会えるんだ」

ヒカルが嬉しそうに、オレたち一人一人にペコペコと頭を下げた。そのたびに、抱いてる猫もいちいちニャニャーと鳴いた。

胸を張って、球異が言う。

「だから、世界一の名探偵に任せなさいって言っただろ」

「てゆーか、お前は一番何もしてないじゃんか」

すかさず、オレは球異に突っ込んだ。

「皆、まだまだ安心するのは早いぞ。この魔法船は、今、敵司令部の王宮のど真ん中に着地している。多分、今ごろ周囲は敵に取り囲まれているだろう。戦いはこれからだぞ」

所田が、いきなり不安になるような事を言った。

「そりゃあ良かったじゃない。清水くん、今度こそ勇者の腕の見せ所よ」

令子がさらに嫌な事を言う。

「ちょっと待ってよ。ボク一人に戦えて言うの？」

オレは言い返した。

「当たり前じゃない。その為の戦闘系キャラでしょ。私たちは魔法で後ろからサポートしてあげるからさ。接近戦は全て、清水くんに任せたわよ」

令子の言い方は冷たい。

「がんばって、清水さん。エコも、大した魔法は使えないけど、一生懸命、後方支援するわ」

影子も応援してくれたが、オレはますます乗る気がしなかった。

「でも、ボクって剣しか武器を持ってないんだろ。こんなんじゃ勝てるかな」

「ああ、もう、グズグズしつこいわね。あんたが、どんなに運動オンチであろうと、どんなにノロマであろうと、絶対に勝てるから！主人公サイドがクライマックスでは絶対に負けないのは、あらゆる物語の鉄則よ。安心して戦ってらっしゃい」

令子が断言した。

その時、ヒカルが口を挟んだ。

「皆、待って。それなら、ここはヒカルが戦いに行くよ。主役はヒカルなんだから、ヒカルが一番がんばらなくちゃ。嫌がっている脇役さんに、甘えたりはできないよ」

おお、なんて、他人思いのいい子なんだ、とオレは感激しかけたのだが、令子のヤツは決して自分の主張を曲げようとはしなかった。

「ダメよ。ヒカルくんの活躍は最後の最後までとっておかなくちゃ。まず、最初のザコ戦は私たちで何とかするわ。だから、ヒカルくんは、後ろで私たちをしっかりと見守っていて」

「もう分かったよ。ボクが先頭に立って戦えばいいんだろ」

渋るのはやめて、あきらめたオレは投げやりに言い放った。

「よく言った！それなら、私も加勢してやるぞ。ここから100ギガトンの魔法原爆を発射してあげよう」

急に所田が声を張り上げたが、こいつは、相変わらず、この夢の世界観を理解してないらしい。何でも「魔法」って付ければいい訳じゃないぞ。そもそも、こんな所で原爆など使ったら、敵味方全滅で、物語もそのまま終わってしまうではないか。

令子も同じ事を思ったらしくて、すぐに所田のセリフをさえぎった。

「所田くん、あんたの見せ場はもう終わりよ。こうなったら、私がとっておきの魔法を使って、清水くんを一瞬で勝たせてあげるわ。それなら、皆、文句はないでしょう」

「令子さん、そんな凄い魔法が使えるの？」

影子が驚いて、口を挟んだ。

「まあね。清水くんとしか出来ない合体攻撃だけど」

令子がニヤリとほほえんだ。一体、どんな策があると言うのであろうか。でも、ほんとに一瞬で勝てると言うのであれば、オレも令子の話に乗ってやってもいい気がする。

「さあ、そうと決まれば、清水くん、一緒に外に出て、戦うわよ」

「ちょっと待った！令子たんは、おいらの彼女だぞ。合体攻撃なら、おいらとしようよ」

いきなり、球異が話に割り込んできた。

「もう、球異ったら、いやね。あなたは私と違う合体がしたいだけでしょ。それはまた、別の夢で二人っきりでいる時にね」

令子のヤツが、かなりアダルトなコメントを球異に返した。影子やヒカルみたいな子どもも一緒にいるのに、こんな大人の会話をしていいのか。

ふと、オレは影子の方を見つめてしまった。ああ、影子はこんなに可愛くて、オレの両思いの恋人のはずなのに、球異と令子みたいな大人の交際は、夢の中でも、まだまだ、ずっと出来ないんだらうな。つい寂しさが心をよぎってしまったのだった。

「さあ、そろそろ、話を先に進める事にしようね。魔法船を消して、全員でいっきょに外に出る事にするぞ」

所田が言った。よく読み返すと、誰が戦うかという言い合いだけで、ずっとストーリーが止まったままである。そろそろ、しびれを切らした所田の気持ちも、確かに分からなくもない。

次の瞬間、オレたち全員は、競技場のような広場の中心に立っていたのだった。どうやら、侵略者ガバナス星人の支配者が住んでいる王宮内の中庭らしい。

そして、オレたちの周りには、人間そっくりの姿をしたガバナス星人の兵士たちが二重三重にも群がっており、それこそ500人は超えているのではないかと言うほどの大人数の敵がオレたちを取り囲んでいたのだった。

「ちょっと待ってよ。こんなにザコ敵がいるなんて、予想外だ。とてもじゃないけど、剣を振り回したぐらいじゃ、すぐには勝てっこないよ」

臆病風に吹かれたオレが、慌てて叫んだ。

「落ち着いて。大丈夫だって。私たちには、この清水くんがいるんだもの」

令子が、動じる様子も見せずに、冷静に言った。

そして、彼女は、左手をオレの頭の上に乗せると、右手を周囲にいる数千人もの敵たちへと大胆に振りかざして、魔法の言葉を唱えたのだった。

「さあ、皆。あなたたちは全員、清水くんになあれ。清水くんになあれ」

なんじゃそりゃあ？

しかし、恐るべきは令子の魔法。この不思議な呪文によって、あれほど沢山いた敵の兵士たちは、なぜか急に戦意を喪失してしまったようで、彼らはいっせいにオレたちの周りから離れてゆき、やがては、一人も居なくなってしまったのだった。オレは剣を使う事もなく、あの一万もの軍隊を全て追いついてしまったのである。

「すごい、すごすぎる。こんな事は魔法科学でも不可能だ」

所田が感嘆した。

「私も、まさか、ここまで、うまく成功するとは思わなかったわ」

令子も言った。

「と言うか、今の魔法、どういう仕組みだったんだよ。ボクの名前が出てきたみたいだけど」

オレは尋ねた。

「あの億の兵士全てを、清水くんの性格にしちゃったのよ。やる気がなくて、すぐあきらめちゃう、めんどくさがり屋さんにね。そしたら、敵キャラの定めで必ず負けると判断した一兆の兵士は、戦うのはムダだと思って、最初から勝負放棄して、さっさと自分から居なくなっちゃったのよ」

令子が得意げに説明した。

ちなみに、今いた敵兵の推定人数が、あとになればなるほど、どんどん増えているような気もするのだが、しょせんは夢の中での話だ。あいまいで判然としないのは、納得していただきたい。

「あのさ。それって、なんか腑に落ちないんだけど」

オレはぼやいた。

「すばらしい！やっぱり清水には勝てないや」

と、いきなり球異が笑顔で大声を張り上げた。

「その通りだ。もし、あの京の兵たちを球異に変えてたのだったら、ここまで見事には追い払えなかっただろう。まさに、清水くんの大功績だ」

所田が大げさに褒め讃えてくれた。

「あの恒河沙の兵をいっぺんに散らせるなんて、エコ、ますます清水さんの事を尊敬しちゃった」

影子も、目を輝かせて言ってくれた。

「清水さん。不可思議の軍隊を片付けてくれて、ありがとう」

ヒカルにまで、お礼を言われてしまった。ヒカルが抱いていた猫までニャーと鳴く。

でも、オレは、何だか、逆にバカにされてるような感じがして、不快になってきたのだった。

「もういいよ！無量大数の軍団は居なくなったんだ。あとは、ヒカルくんのママを見つけだして、いっきにエンディングだ。さっさとストーリーを進めるぞ」

オレは怒鳴った。

「あ、清水がやる気出してる。おいおい、お前らしくないぞ」

と、球異が笑った。この野郎、まだしつこく言うか。

オレたちは、敵が一人も居なくなった王宮内を走り出した。

夢の中での不思議な特徴として、その夢ではじめて知った場所、地形であっても、夢の体験者である我々は、なぜか、その空間の地理、地図をうっすらと把握している、というものがある。この王宮にしたって同じで、はじめて降り立った場所であるにも関わらず、オレたちには、その内部構造がよく分かっていて、さらには、ヒカルのママが捕われているらしい部屋の位置まで、すでに認識していた。だから、迷う事なく、一直線に目的地へ進む事ができるのだ。

突撃中、ほんとに人っ子一人、出会う事はなかった。恐るべき令子の魔法と言うべきか、それ

とも、夢の世界のご都合主義のおかげなのか。

「悪者さんたちは、本当に皆、いなくなっちゃったのね。すごいわ」

と、影子が言った。

「まあ、私の魔法は、この王宮内全体に効いたはずだからね」

令子が答える。

「ヒカルさんのママまで、清水さんになってなければいいんだけど」

本人に悪意はないのかもしれないが、影子がさらりと毒を吐いた。

嫌んなっちゃうが、オレって、そこまで皆から無気力人間に思われているのだろうか。

そうこうしているうちに、ついに一同は、ヒカルのママが捕われているはずの部屋の前にまでやって来たのだった。

「ついに感動のフィナーレよ。この中に、ヒカルさんのママがいるんだわ」

令子が叫んだ。

「皆。これまで助けてくれて、本当にありがとう」

ヒカルが嬉しそうに礼を言った。ヒカルが抱いていた猫もファアとあくびをした。

短い付き合いではあったが、この子は本当にいい子だったと思う。また一緒に夢の中を冒険してみたいものだ。

ところが、土壇場で、そうあっさりとは話が進んではくれなかったのである。

オレたちが、いざ、その部屋の中に踏み込んでみると、そこには一人の長身の女性がたたずんでいた。すぐに、その女性が、ヒカルのママとは別人である事に、オレたちは気が付いた。

「皆さん、よく、ここまでたどり着いたわね。最後の関門は、このあたしよ」

と、その女性は言った。

「あなた、ラリーじゃない。なんで、こんなところに！」

令子が叫んだ。

「だって、あたしこそが、このガバナス星の支配者なんだもん。ガバナス星軍の絶対的指導者にして、大金持ちのセレブのお嬢さまと言う設定よ」

令子にラリーと呼ばれた女性が、楽しそうに答えた。

彼女もまた、ドリームウォーカーの一人なのだ。しかも、オレたちメンバーとは、リアルでも面識のあるケータイ小説仲間だったりする。集団行動が嫌いらしくて、冒頭から落ち合って、オレたちと一緒に夢の中の冒険をする事はほとんど無いのだが、こんな感じで、夢の途中でばったりと出くわしてしまうような事がよくあるのだ。さらには、こんな感じで、敵キャラだったり、トラブルメーカー役だったりして飛び入り参加してくるケースが多いのである。

「まあ、見てよ、今回のあたしの衣装。一惑星の独裁者の娘だから、最高級のブランド品よ。どこぞの星の平民役であるあなたたちなんかとは大違い。やっば、この役を選んで良かった」

ラリーが嬉しそうに、自分の服を皆に見せびらかした。確かに、この世のものとは思えないほど、けばけばしくて、きらびやかなパーティドレスを身に付けている。ラリーも夢の中では絶世の美人なので、こんなハデすぎるファッションでも、それなりに着こなしてしまうのだ。

ラリーの素性については、オレたちもよく分かってはいない。自分ではリアルでも大金持ちの

娘であるような事を言ってるのだが、時々、おばさんくさい事をするので、実はそういう年配者じゃないかともオレたちは疑っている。夢の中ではいくらでも若返れるので、ラリーはその事を利用して、わがままに楽しんでるんじゃないかと言う感じもするのだ。彼女の場合、皆で冒険する事よりも、夢の中での自分の役回りにこだわっており、それゆえに、オレたちと一緒に行動したりはしないで、こんな風に、いきなりヘンなところで現われたりするのだ。

「どうでもいいけど、なんで、あんたは私の魔法にかからなかったのよ。周囲4キロ四方の人間は、皆、清水くんになって、やる気をなくしたはずよ」

令子が不服そうにラリーに訊ねた。

「うふふ。あたしは、リアルでも、夢の中でも、自分で働いたりしないお嬢さまよ。元から、やる気を出す必要がない人間に、そんな魔法がかかるものですか」

ラリーは、おかしそうに答えたのだった。

「ほんと、むかつくわね、この女。清水くん、こいつにだったら、あなたでも絶対に勝てるわよ。思い切って、その剣でやっつけちゃいなさいよ」

令子がオレに命令した。

「でも、相手は丸腰だよ」

オレはためらった。

「なに、迷ってるのよ。この女は、清水くんより自分の方がやる気がないって、得意げに自慢してるのよ。くやしくないの？ちょっとは怒りなさいよ」

令子がムチャクチャな事を言った。正直な話、オレとしてはラリーよりも令子の言動にむかつき始めているところなのだが。

その時、身の危険を察知したラリーが慌てて言ったのだった。

「待って、清水くん、暴力だけはやめてよ。ヒカルの母親だったら、あたしの後ろにあるドアの向こうの部屋にいるからさ。そちらに引き渡すから、惚れ惚れする美貌のあたしを傷つけないで。あ、いや、待てよ。それよかさ、こうするのは、どうかしら。清水くんって、どうせまだ、ニートしてて、仕事についてないんでしょう？だったら、この夢から覚めたらさ、リアルで、あたしが雇ってあげるわ。月給30万円はどう？悪い話じゃないと思うんだけど。その代わりに、この場はあたしを見逃してちょうだいな」

「ちょっと、あんた、なに言い出してるのよ」

令子が叫んだ。

「ただの取引よ、取引」

と、ラリーが笑って舌を出す。

「ふざけないで。そんな誘いに清水くんが乗るものですか」

令子が突っぱねようとしたが、その時、オレは頭がポワーンとなりだしていたのだった。

なにしろ、30万円である。アルバイト雑誌で見つけた仕事なんかよりも、はるかに給料が高い。ラリーが本当にリアルでも金持ちであると言うのならば、恐らく、ウソではないのであろう。30万円ももらえたら、何に使う？確実に貯金が増えていくぞ。ひよっとしたら、一年後には自費出版するぐらいのお金だって溜まるかもしれない。こそこそとネットでケータイ小説なんて書いて

てたりしないで、自分の本も出せちゃうかもしれないのだ。

「ほら、清水くんもきっぱりと言い返してやりなさいよ」

令子の言葉のあとに、オレは力強く怒鳴った。

「おい、ラリー！」

「なによ」

「お前の連絡先を教えろ。楽な仕事だったら、その取引に応じてもいいぞ」

「こらこら、清水くん、裏切るつもり？」

令子が慌てた。

「そうだ、清水。お前は、こんな夢の世界と現実のどっちが大切だと思ってるんだ。よく考え直せ」

所田も外野席から叫んだ。

「悪魔に魂を売っちゃダメだぞお」

と、球異も言葉を続けた。

「なんなら、30万円で、球異もあたしの愛人に雇ってあげようか」

ラリーがさりと言ったので、球異があっさりラリーになびきかけたのだが、もちろん、次の瞬間、令子に首根っこをおさえつけられていた。

「もう、だめえ！」

と、突然、声を張り上げて、割り込んで来たのが影子だった。

「清水さんはエコの恋人よ。ラリーさんには絶対に渡さないんだから。こうなったら、エコがラリーさんをやっつけて、清水さんの心を取り戻してやる」

意外な展開だった。このような状況で、オレの為に、のんびりした影子がこんなにも息巻いてくれたのだ。怒った表情の影子も、すごく可愛い。

「一体、どこが良くて、この女たちは清水くんの取り合いをしてるのやら」

あきれたように令子がつぶやいた。

「あら、影子ちゃん。あたしと戦うつもり？あなたにケンカなんか、できたっけ？」

ラリーがあざ笑うようにうそぶいた。

「エコが使う魔法は癒しの術よ。ラリーさんの、すぐお金で解決しようとする汚い根性をエコの力で改心させてやる」

「そんな事できるもんですか」

すっかり見くびっているラリーの前にまで詰め寄ると、そこで影子は呪文を唱えた。

「目には目を、歯には歯を！お前みたいなウジ虫は、夢に溺れて、地獄に落ちろー！」

癒し系魔法とか言ってるわりには、ものすごい内容の呪文である。

次の瞬間、影子の姿は巨大な蝶々に変身したのだった。

それを目前で見たラリーは、悲鳴をあげて、失神してしまったのであった。

「あら、ごめんなさい。ラリーさんって、虫が苦手だったの？エコの可愛い蝶々姿を見て、癒されてくれるかと思ったのに」

すぐ人間の姿に戻った影子が、きょとんとしながら、謝った。

普通の神経の人ならば、虫嫌いじゃなくても、あんな巨大な蝶々をすぐ目の前で見せられたら、びっくりして気絶してしまうもんだろう。そのへんが分からないあたりが、やっぱり、影子はどこか皆とは感性がずれているのである。

「とにかく、これでラリーはやつけたわ。影子ちゃんのお手柄よ。いよいよ、ヒカルくんをママと合わせてあげましょう」

もうムチャクチャな展開の為、ややヤケクソ気味になった令子が怒鳴った。

これで、ようやく、今回の夢もエンディングを迎えようとしているのである。残るシーンは、ヒカルとママの感動の再会だけだ。

「ありがとう、ほんとに、皆、ありがとう。ヒカルは、皆の事を絶対に忘れないよ。頼れる令子ねえさん。かわいい影子ちゃん。天才の所田博士。楽しい球異おじさん。そして、世界最強の清水にいさん！」

ヒカルが、あらためて、一人一人にお礼を言ってくれたのだった。ほんとに礼儀正しい子である。

奥の部屋につながったドアを開けながら、所田が言った。

「さあ、ヒカルくん。ママと運命の対面をしなさい。恐らく、二人が一緒になる事が次元を移動する為の鍵になっているのだろう。これから、ママと接触すれば、きっと、地球にも戻れるに違いあるまい」

所田は勝手に結果を決めてしまった。でも、恐らくは、そういう筋書きになるのだろう。

しかし、ここで、オレたちも気付いていなかった、意外な出来事が起きたのだった。

この時点で、はじめて、ヒカルに抱かれていた子猫がニャーと大きく鳴くと、ヒカルの胸元から飛び降りた。これまで、ヒカルはこの猫を一度も放した事がなかったのだ。よっぽどの猫好きなのか、他のメンバーに迷惑がかからないように、ムリやり抱き続けてたかの、どちらかだと思っていたのだが、実はそうではなかったのである。

猫が床に着地した瞬間、ヒカルの姿はモヤに包まれて、いきなり消滅した。そこには、猫だけが残ったのだった。

この現象を見て、オレたちは驚いた。ドリームウォーカーの一人が先に目覚めてしまった場合、こういう消え方をするケースも無い訳ではないが、猫だけ後に残ると言うのは少し変である。オレの学をひけらかして喩えてみるならば、逆チェシャ猫状態だ。

さらに、このあと、オレたちは予想もしていなかった真実を目にしたのだった。

ヒカルのママが捕われていると言う部屋からも、ニャーと猫の鳴き声が聞こえてきたのだ。ヒカルのママも、猫を抱いていたと言う、ベタなオチだった訳ではない。

部屋の中からは、本当に猫だけが出てきたのである。それも、大きさや種類、毛づやなどから推測して、ヒカルの抱いていた猫の親っぽい。

二匹の猫は走り寄り、嬉しそうに体をすり合わせると、次の瞬間、同時にこの場から消えてしまったのだった。

「これは、どういう事なんだ」

オレが代表して、つぶやいた。

「あなたたち、知らなかったみたいだけど、あの猫の方がヒカルくんだったのよ」

そう答えてくれたのは、気絶から目を覚まして、ゆっくりと立ち上がったラリーだった。

思えば、こいつはヒカルママを捕えていて、その正体を知っていたのだ。きっと、最初から、この真相を分かっていたに違いあるまい。

「あなたたちがヒカルだと思っていた子どもは、本当は子猫のヒカルが作り上げていた、夢の中の産物だったの。恐らくは、ヒカルの飼い主の投影だったんじゃないのかしら。性別がはっきりしないとか、どこか曖昧模糊としていたでしょう。それは夢の中で想像された人間だったからよ」

「じゃあ、あの猫がドリームウォーカーだったのか」

所田が言う。

「まあ、そういう事だったんでしょうね」

物語もめでたく終わって、ラリーはすでに馴れ馴れしく、オレたちの会話にと混ざってきていた。

「動物のドリームウォーカーも存在するなんて、はじめて知ったわ」

と、影子もつぶやいた。

「まだまだ、ドリームウォーカーの仕組みは謎に包まれてるからね。だから、この夢世界は面白いのよ。さあ、今日の冒険もエンディングまで拝めた事だし、あたしたちも、そろそろ、朝を迎える事にしましょうか。明日のチャットには、あたしも顔を出すわ」

ラリーが言った。

「いいわよ、あんた、来なくても」

令子が冷たく言い返したのだった。

その頃、球異のヤツは、一人だけヒカルの秘密を理解しきれていなかったらしく、すご腕探偵を気取って、一生懸命、部屋の中をうろついて、消えたヒカルの事を探しまわっていた。

全員が目覚めは近づいているらしく、周囲の景色はぼんやりと薄れ始めていた。

エンディング

夢、夢、夢、全ては幻の世界。

オレたちはドリームウォーカーだ。

明日もまた、オレたちは、夢の中で集まって、何でもアリの大冒険を楽しむのである。

小説「ケータイ小説なんていない」は、私が2010年に自費出版で発行した連作ライトノベルです。自分の本を正式出版する事なんて、もう二度と無いだろうと思い、やりたい事を全て詰め込ませてもらいました。

本作「ケータイ作家はケータイ小説の夢を見るか？」は、いちおう、「ケータイ小説なんていない」のパイロット版と言う位置づけにはしてありますが、実は、本作をいっき書きした頃、すでに「ケータイ小説なんていない」の方も書き始めておりました、そもそも、この二作品は最初はケータイ小説サイト上で連載公開していたものなのでした。

そのケータイ小説サイトにて、作品コンテストが開催されてましたので、そのコンテスト用に「ケータイ小説なんていない」の特別エピソードのつもりで、いっき書きしたのが、この「ケータイ作家はケータイ小説の夢を見るか？」だったのであります。だから、そのコンテストの応募要項にあわせる為、テーマを（無理やり）スペースファンタジー扱いにしたり、あるいは、本作のみのゲストキャラとして性別不明のヒカルを登場させたりしたのです。影子やラリーの設定が、本編「ケータイ小説なんていない」と微妙に異なっているのも、そのへんの事情のせいです。

他にも、内容をカスタマイズしてある為、「ケータイ小説なんていない」のストーリー構成の特徴である現実世界やチャットシーンの場面が無かったりします。そのせいで、「ケータイ小説なんていない」と比べると、中身が薄くなったような感じもするのですが。

ケータイ小説のような夢の空間をケータイ作家仲間全員で冒険する、と言う骨子部分だけは両作品で完全に共通しています。そして、「ケータイ小説なんていない」の方が絶対に面白いので、本作にわずかでも興味を感じてくださった方は、ぜひ「ケータイ小説なんていない」の方も読んでいただけたら、作者としても光栄きわまりない次第です。（電子書籍版は無料で読めます）

なお、この電子書籍パブー公開版では、読者により親しんでもらえますように、コミpo!で描いた登場人物一覧と、あらたに描き起こした「楽しい夢見術」というコラム漫画を付け加えさせていただきました。

（コラム「楽しい夢見術」のみ有料扱いですが、[e3paper](#)にて無料ダウンロード可能です。）

[「ケータイ小説なんていない」初版](#)（ブイツーソリューション発行）

[電子書籍版「ケータイ小説なんていない」](#)（eブックランド発行）

[「雑学 楽しい夢見術」](#)（e3paper）

ケータイ作家はケータイ小説の夢を見るか？

<http://p.booklog.jp/book/16673>

著者 : anurito

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/anurito/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/16673>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/16673>